

作物名：ねぎ

病害虫名：小菌核腐敗病（病原：*Botrytis squamosa*）



発病後期の葉鞘の裂開



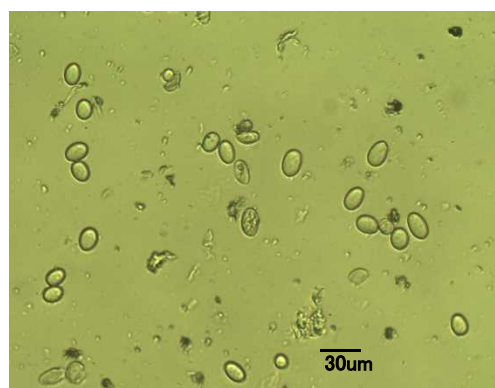
発病後期の葉鞘内の菌核形成



内葉の葉鞘に形成された病斑

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉鞘及び葉に発生する。
- ・地下部の葉鞘が発病すると、地上部の生育は抑制される。
- ・葉鞘では、表面に淡褐色の病斑を生じ、次第に拡大して外葉から内葉に向かって腐敗する。被害がひどい場合は、病斑を中心に縦に亀裂が入り、内葉が突出することがある。病斑が古くなると表面に黒色、楕円形～不整形のやや盛り上がった菌核を多数形成する。
- ・葉では、黄白色の小斑点や葉先枯れを生じ、高湿度では暗緑色水浸状で大型の不整形病斑となり、その上に分生子（灰色のかび）を多数生じる。
- ・葉鞘と葉では、葉鞘に発病した場合に被害が大きくなる。



小菌核腐敗病菌の分生子

2 伝染源及び伝染方法

- ・夏は菌核の形で作物残渣や苗の表面、土中などに残存しているものと思われる。気温が低下してくると、ほ場などに残った菌核の上に胞子が形成され、これが飛散してネギに付着し、発病する。
- ・胞子が飛散し空気伝染する。
- ・土中に残った菌核から直接菌糸が伸びてネギに感染する。

3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で、不完全菌類に属する。
- ・比較的低温を好み、晩秋から春にかけて発生する。
- ・本病の発生は年次変動が大きく、冷夏の年の秋には多発し、猛暑の年には発生が少ない。

4 防除対策

- ・ほ場の排水を良くする。
- ・多肥は発病を助長するので適切な肥培管理を行う。
- ・発病株はほ場外に持ち出して処分する。
- ・発生ほ場では早期出荷を心がける。

5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-②（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編3（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影